

3.活動の内容

(1) 具体的な活動の内容

・県内の里山(竹を含む)に関わる活動をしている団体相互の連絡調整、及び協働活動の検討

・秦地区コミュニティ計画推進市民会議 との協働活動

- (2003年2月19日)里山を中心に分布している秦地区の遺跡を調査分類すると共に、近年の市民活動等までの内容・年代等分類し一年がかりで整理して、来年度「ふるさと再発見・秦」という展示イベントを開催することとなった。(会場:秦ふれあいセンター会議室 参加者25名)
- (2003年3月19日)「里山の保全・活用」や「南海大震災の津波を配慮した防災活動」について意見交換し、今後は「秦山の保全・活用」や「秦地区における地域防災マップ」について、両グループが協働して取り組むことになった。(会場:秦ふれあいセンター会議室 参加者25名)

・「高知県技術士会」及び「NPO高知市民会議」との交流研修会へ参加して交流(2003年2月15日)

- 「秦泉寺公園」を事例としての、立場の異なる土木技術者とNPOとの意見交換会に講師として参加
- 市民活動の経過等及び整備計画の概要等についての「事例発表会」及び「現地での計画方針」
- 市民主導の里山公園づくり活動や地元との意見調整などについての参加者との意見交換会
- (会場:秦ふれあいセンター会議室及び「秦泉寺公園」 参加者:20名)
- (事例発表者:漁師, 交流相手:高知県技術士会及びNPO高知市民会議の会員等)

・全国の里山(竹を含む)に関わる活動をしている団体との連絡調整、及び協働活動の検討

・「日本の竹ファンクラブ」会員との交流会(2003年3月15日)

- 竹について、いろいろな側面(食材・建材・竹炭・竹林管理・行政との交流等)から意見交換
- (会場:高知新阪急ホテル、他 参加者:漁師を含め8名)
- 平石 真司 (日本の竹ファンクラブ 代表)
- 田中 克樹 (同クラブ会員・農山漁村文化協会・NPO緑の街ノ港北ニュータウン緑の会)
- 河野 秀明 (同クラブ会員・烏山公園愛護会)
- 中元 秀幸 (同クラブ会員・東本郷第一公園愛護会)
- 出口 松司 (同クラブ会員・竹活用事業会社経営)
- 高知市役所 (まちづくり推進課等 2名)

・財団法人日本システム開発研究所等の「都市計画における市民団体活動の事例調査」への協力

- (2003年2月13日)公園整備計画の策定やその年度別施工工程が市民主導でなされて話題となっている、里山公園として整備中の「秦泉寺公園(1.5ha)」等について、計画が市民主導でされることとなった経過や計画の概要等についての「事例調査」への協力
- 会場:秦ふれあいセンター会議室、及び「秦泉寺公園」
- 参加者:10名 (財団法人日本システム開発研究所等調査人4名:漁師を含め地元4名:市役所2名)

・里山その他、里山公園・竹・植物園・ビオトープ等、身近な自然や植物に関わりの有るものに、市民が、親しみを持つためのイベント等の活動の企画・運営、及び、それに関連のある活動をしている団体の活動や組織づくり等についての支援活動

・牧野活用交流会議(「高知里山ファンクラブ」内の専門部会)

- (2003年1月21日)「牧野植物園」と、県(環境保全課)・市民・ボランティアを繋ぐコーディネーターとしての役割を果たすことを目的とし、その目的達成のため、市民主導による様々な提案を行い、その実現への多様な支援活動を実施する」との基本コンセプトに基づき、「設立趣意書」と「今後の活動方針」について検討
- (会場:高知NPO事務局内会議室 参加者5名)
- (2003年2月26日)牧野植物園の管理担当課である県環境保全の課長と補佐及び高知工科大学助教授も参加しての、「設立趣意書」と「今後の活動方針」及び官民の協働活動等について意見交換
- (会場:高知NPO事務局内会議室 参加者10名)
- (2003年3月22日)牧野植物園の管理担当課である県環境保全の補佐も参加しての、今後の活動方針及び来年度の官民の協働活動等について意見交換
- (会場:高知NPO事務局内会議室 参加者5名)

- ・「高知県技術士会」及び「NPO高知市民会議」との交流研修会を支援(2003年2月15日)
 「秦泉寺公園」を事例としての、立場の異なる土木技術者とNPOとの意見交換会の講師
 市民活動の経過等及び整備計画の概要等についての「事例発表会」及び「現地での計画方針」
 市民主導の里山公園づくり活動や地元との意見調整などについての参加者との意見交換会
 (会場:秦ふれあいセンター会議室及び「秦泉寺公園」 参加者:20名)
 (事例発表者:漁師, 交流相手:高知県技術士会及びNPO高知市民会議の会員等)

- ・舟入ピオトープの改善のための現地検討会

1昨年から昨年にかけて支援していた、地域の子も達が自分たちで考えながら手作りしたピオトープの流入水量の調整手法等について、造園工事に詳しい技術者を現地に招き、検討した

- ・里山(竹を含む)に関する調査、及び保全・活用施策の実現に関する方策の検討

- ・里山保全地区第1号指定地「秦山」の現地踏査(2003年3月19日)

秦山の周辺環境を始め、進入路の整備状況や地形及び植生、特に竹の既存植生侵略状況などの概要を知るための現地踏査を実施した。(秦地区の住民有志約50名は、里山指定された前年度と今年度2月に、現地踏査を済ませているため、協働活動検討の前提条件として、現地踏査を当会会員が独自で実施した。)
 (会場: 秦山の全域 参加者:3名)

- ・「(仮称)第1回里山問題懇談会」開催(2003年1月22日)

メンバーで、事前に内容及び意見を伺うゲストの人選及び参加交渉をして、懇談会を開催した。
 里山について、竹問題への対応を中心に、多様な意見交換会となった
 (会場:高知市民活動サポートセンター会議室 参加者10名)

三宅 尚 (高知大学 理学部 自然環境学科 生物科学 講師)
 鳥居 厚志 (独立法人森林総合研究所四国支所 森林生態系変動研究グループ長)
 野本 裕之 (高知新聞 論説委員)
 川竹 大輔 (高知県 特別職 知事秘書)
 清水 博 (高知市 環境部 環境保全課 自然保護係長)
 梅原 憲作 (高知・竹林問題研究会 会長)
 「事務局等」 徳弘 日出男・広田 良作・漁師 明・漁師 政子

- ・春野町における「竹林変遷状況についての調査」の準備に着手(2003年3月20日)

竹資源の有効活用事業化と防災上の問題について協議をした結果、両者が協力して、
 「航空写真を活用して、春野町全域の竹林変遷状況について調査」することになり、早速準備を開始した。

- ・竹資源の有効活用に関わる調査・研究・事業化の推進、及び関連団体との交流と相互支援

- ・春野町における竹資源有効活用事業化と防災上の問題について、春野町担当者との協議

(2003年3月20日)春野町が積極的にに関わり、高知における竹資源供給組織として、NPOの仲介と「財団法人オイスカ」及び「竹資源研究所」の協力で、産・学・官・NGO/NPOによるパートナーシップにより、前年11月に立ち上がった、「竹資源有効活用コンソーシアム(会長:高知大学山本晋平学長)」に、アドバイザーとして参画している立場で、オブザーバーとして参画している春野町の竹有効活用事業化の担当者と、竹資源の有効活用事業化と防災上の問題について協議をした結果、両者が協力して、「航空写真を活用して、春野町全域の竹林変遷状況について調査」することになり、早速準備を開始した。

- ・里山(竹を含む)に関わる官・学・民の関係団体の個別施策情報の収集・整理・公開及び活用

- ・里山(竹を含む)に関わる官・学・民の関係団体の個別施策情報の収集・整理

関係各署の協働が有効に機能するためには、その前段として、環境関連部署の「身近な里山の保全・活用のための各種施策」、森林関連部署の「森林環境税・木の文化県構想」、土木関連部署の「高知市周辺の里山を対象としたグリーンベルト構想」を始めとする、国・県・市町村及び各種団体等の里山に関わる、上下左右多様な関係部署が、各々個別に計画しているが関わりのある施策等の情報を、関連地域別に収集整理することが必要である。そして、それを公開・活用して、その実現に向けて、行政への連携の働きかけと県民意識の高揚支援を行っていきたいと考え、準備を進めています。

(2) 活動の特徴となっている点

・里山に関心の有る人なら誰でも参加できる、市民レベルの交流活動である

この会はネーミングからして、高知里山ファンクラブ という誰もが親しみの持てるものである。その名称から受けるイメージどおり、この会の活動の目指しているところは、市民が里山に関心を持ち、「里山」を県民市民の宝物として愛し、身近に多様な活用をしつつ良好な里山環境を保全していけるようなものである。そして、行政との協働や専門家のアドバイスを取り入れつつも、単なる一部の専門家だけの研究活動の場ではなく、全体の方向性としては、あくまでも「市民レベルの交流」のような活動である。

そのため、里山という言葉の定義に不必要に拘ることなく、里山公園・竹・植物園・ピオトープ等、身近な自然や植物に関わりの有るものに、市民が親しみをもち、イベント等の活動の企画・運営を積極的に推進する一方、そうした活動の趣旨に関連のある活動をしている団体の活動や組織づくり等についての支援活動も同時平行して行い、この会独自の手柄より、協働による大きな効果が得られるような方向で活動を企画していきます。

その手始めとして、県内はもとより全国の、里山等(竹を含む)に関わる、様々な支援活動をしている団体相互の連絡調整、及び協働活動の検討 に力を入れて行きます。

・住民が防災に関心を持つキッカケづくりや、専門家や行政との通訳的な支援活動

高知においては、今、里山は、南海大地震の「津波の避難場所」として、注目され、その価値が見直されつつある。そこで、平時の有効活用ばかりでなく、「津波の避難場所」という里山の側面も考慮して、そのために必要な整備等について、各々の地区の住民と官や企業等と一緒に考えて具体的に考え、実現の方策や官民の役割分担などについても、抽象的でなく、その地区独自に具体的に検討することが必要になる。そこで、この会としても、住民主導を貫きつつも、とすれば無頓着になりがちで、命を守る地域防災に関心を持つキッカケづくりのお手伝いや、得てして難しい説明になりがちで、せっかくの有効な情報が市民の役に多々ないと言うようなことを少なくして、専門家や行政の智識や情報を有効活用するために、市民と、防災の専門家や行政との通訳のような役割が果たせるような活動を、積極的に企画し・運営する方針である。

・立場や能力の違いを有効に活用できる垣根の無い複合組織をつくり運営する活動

ある特定の場所に限定したし事業活動であっても、それぞれの立場や価値観によって全く異なる対応をしていく事が常であり、ある一つの活動が立場により正反対の受け止められ方をされることも珍しくない。このように、里山の保全・活用も多様な問題を含んでおり、里山の将来を考えるためには、地域住民を中心としつつも、NPOや企業そして行政も参加して、多様な連携に基づく官民のパートナーシップにより活動することが望ましい。そのためには、官民の垣根や縦割り行政などの制約にとらわれず、これらを統括調整する核となるべき組織が不可欠である。しかしながら、現況においては特定の行政にこの役割を期待することは難しく、むしろ「住民と行政や企業」、「行政と行政」との通訳や接着剤としての活動が期待できる NPO 等の組織が中心となって企画を進めることが、総合的な施策の実現への最も有効な手段である。

・市民が竹に関心を持つキッカケとなる市民活動の支援活動

活用も手入れもされず放置される「もうそう竹」の林が急増した結果、横方向に非常に繁殖力が強い「もうそう竹」が従来栽培されていたエリアからはみ出して、生息エリアを拡大している。その結果、里山の植生は多様性を失い、森の生態系は壊滅的な打撃を受けつつ有る。さらに困った事に、竹は根が浅い上、葉は腐り難く、しかもその葉が水をはじいて雨水の浸透を阻害することにより浸透水量が少なくなり、下流への雨水流出量が増大する。その性質が、結果として濁水や洪水・地滑りなどの災害を誘発する危険性を高めることとなるのではないかと心配されている。しかしながら、単に防災目的で竹を一時的に伐採してみても、毎年急激に成長する竹林とのイタチゴッコを招くだけで継続できない。継続可能な抜本的な対策は、市民が竹に関心を持ち、「もうそう竹」を、排除すべき環境侵略者から、共存可能な有益な植物に復帰させることである。その為には、土地の権利者や行政のみに任せっきりにするのではなく、地域住民を始め、県民・NPO・企業をも含めた、多様な立場の人々が、それぞれの視点で新たな竹の活用方法を考え、一致協力して竹活用促進を図る機運を高めることが必要である。この会では、そうした「市民が竹に関心を持つ」ための市民活動を支援します。

・伐採した竹を資源として有効に活用するための事業化を支援する活動

竹の生産者・素材活用製品の生産・販売企業・製品の購入先までの総合的な「竹資源有効活用コンソーシアム」という市民・NPO・行政・企業・大学といったあらゆる主体によるパートナーシップによるグリーン購入企業共同体が、平成16年11月6日に、全国で始めて高知で発足した。

しかしながら、購入する側は、小規模供給者との直接取引では効率が悪く採算が取れないため、大量一括供給が希望条件。一方、産地となる高知県では、伐採した竹の販売先を安定的に確保することが出来れば、安価であっても、小規模ながらも竹の供給を希望する事業者や団体が現れてくる。しかも、竹林侵略被害から里山を守る為には、そうした小規模伐採者からも購入の道を開いておくことが必須条件。

そこで、そうした小規模伐採者からの竹材を買い取り、集積して置く広いスペースを持つ事業所が必要となる。その場合、採算の悪さをカバーする何らかの行政等による支援策が必要となる。集荷を支援するのも一手法。知的障害者の施設やシルバー人材センター或いは、NPOなどの事業活動とすることも考えられる。

当会では、「もうそう竹」による環境破壊を防止し、竹を、排除すべき環境侵略者から、共存可能な有益な植物に復帰させるために、そうした活動の企画・調整・運営及び活動団体の支援活動を推進します。

・里山(竹を含む)に関わる、多様な施策の調整を支援する活動

近年、里山の保全・活用に向け、官民ともに様々な団体が、それぞれ独自の視点からのアプローチを試みはじめている。そうした、多様な試みを相互矛盾や無駄を少なくして、効率的に活用するためには、その前段として、そうした一見関わりの無さそうな施策情報を、関連地域別等の明確な共通要素により整理・解析し、その施策情報が一元的に活用できるようにする必要がある。

そうした、関係各署の協働が有効に機能するためには、その前段として、環境関連部署の「身近な里山の保全・活用のための各種施策」、森林関連部署の「森林環境税・木の文化県構想」、土木関連部署の「高知市周辺の里山を対象としたグリーンベルト構想」を始めとする、国・県・市町村及び各種団体等の里山に関わる、上下左右多様な関係部署が、各々個別に計画しているが関わりの有る施策等の情報を、関連地域別に収集整理することが必要である。そして、それを公開・活用して、その実現に向けて、「行政への連携の働きかけと、県民意識の高揚のための支援活動」を推進します。

・機動性と組織力とを合わせ持った、柔軟な組織活動

この高知里山ファンクラブと言う会は、「高知NPO」という、高知県内最大級の影響力を持つ大きなNPO組織の中の、1事業部として位置づけられている。しかも、活動する会員の身分は高知NPOの会員であることに拘らず、各専門部会毎に、その専門部会の目的に賛同する人が自由に参加できる方式である。そのため、活動参加者やオブザーバーの募集において、容易に広がりを持つことが可能である。

しかも、事業部責任者や専門部会の長に大きな権限を与えることにより、平時は、少人数合議制で、決裁の早い小回りのきく組織として、身軽な活動をすることが出来、体外的に組織力が必要な時には、母体である「高知NPO」という組織を前面に出すことができる、柔軟な組織活動が可能な会である。

さらに、各事業部を統括する担当理事の相互交流により、必要に応じて母組織のその事業部以外の会員の支援や、理事を始めとする会員が所属している企業や団体の協力までも期待できる状況である。